# 第４章　三芳地区（旧三芳町）

## １．位　置

三芳地区は関東地方の南東部を占める房総半島の南部、旧安房郡のほぼ中央に位置し、東は旧丸山町、西は旧富浦町及び館山市、南は館山市、北は旧富山町に隣接している。区域は東西約５．６キロメートル、南北約１０キロメートルである。

## ２．地　形

地形的には、北部の安房中部山地と南部の鏡ケ浦低地帯とに大別される。

北部の安房中部山地は、旧富山町、旧丸山町との境界辺から東西に走る東西に走る標高３００m級の山稜が西方に連なり、その支脈は南方に向かって漸減し、２００mから１００m以下の丘陵が南方の鏡ケ浦低地帯に臨んでいる。

三芳地区の骨格をなしている山地は、地質学的には新生代第三紀の地層からなり、それに続く平地は第四紀洪積層の畑地と、沖積層の水田地帯とからなっている。

## ３．山　岳

三芳地区山岳は大別すると北東部の鷹取山から続く大日山とその周辺の山・中央部の金比羅山と周辺の山・滝田城から続く山々の３地域に分けることができる。

### １）宝篋山（ほうきょうざん）

①概要

ア）所在

旧三芳村増間と旧丸山町宮下の界にあり、増間上地区の北東約 1.5 ㎞で尾根続きの大日山から約５００ｍの位置にある。

イ）標高

３４１．５ｍ

ウ）歴史

三芳地区では宝篋山又は宝篋塔（ほうきょうとう）と呼び丸山地区では宝篋塔山（ほうきょうとうさん）或は宝経塔などと呼んでいる。大日山から鷹取山・御殿山への縦走コースの途中にある山で、林道畑塩井戸線から直接登るコースもある。大日山の峯続きにあり、大日山経由で行った方が一般的である。山頂にはマテバシイの樹幹の下にひっそりと文化５年(1808)記銘の宝篋塔と呼ばれる石塔が立っている、この塔は地面から三段に石が積み上げられ、その上に窓のある台がのせられており、更にそのうえに石塔が立っているが、内

部は空洞である。石塔の一面に「一切求心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼」の文字が刻まれている。他の三面には全て梵字が刻まれている。

エ）主な自然

◆宝篋山で見られる植物

大日山の項参照

オ）交通

館山駅から日東バス平群線大畑下車、徒歩２．５キロ(40 分)で基点の増間ダム下駐車場(トイレ有り)につく

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

大日山から往復２０分、大日山までは大日山の項参照

大日山から御殿山への縦走コースの通過点(大日山から１０分)

林道畑塩井戸線から往復２０分、大日山まで１０分

③付近の見どころ

ア）歴史

◆海軍航空機墜落慰霊碑

宝篋山山頂の西１００m位のところにある。

太平洋戦争開戦直前の昭和 16 年(1941)5 月 29 日、館山航空隊所属の練習機が大日山に墜落。搭乗していた海軍航空兵３名が全員殉死した。

その後、増間区消防団員と婦人会員が滝田村の後援を得て、慰霊碑を建て、その霊魂を弔った。

## ２）大日山（だいにちやま）

大台山から見る大日山

①概要

ア）所在

旧三芳村増間にあり、増間上集落の北東１キロのところにあり、宝篋山の山続き南西５００mほどのところにある。

イ）標高３３３．３m

大日山から富山と津辺野山、遠く富士山

ウ）歴史

山頂に大日如来の石碑や石像があるところからこう呼ばれている。「千葉縣史」に瀧田村大字増間の東北にあり、頂上は眼界広く安房全国一望の下にありとあり、又三芳村史には大日山南中腹には増間廃寺跡があり、山上に安永 6 年の大日如来の石碑がある。山頂には小さな

金剛界大日如来の石像が石積みの岩室に納められ、傍らに安永 6 年の石碑といま少し小さな大日如来碑が立っている。

エ）自然

大日山山系は旧三芳村の北部に位置し、旧富山町及び旧丸山町の境界を接しており、県内の山の中でも高い部類に入る山で、比較的山域が大きく、増間川水系の上流は水源ダム(増間ダム)が造られている。又段差もあり、増間七滝を始め数多くの滝がある。また動植物も多く、最近になって希少種もいくつか確認されています。

◆大日山で見られる主な植物（鷹取山・宝篋山・日枝神社・林道を含む）

比較的山域がおおきいため､現在５００種を越える種が確認されている。千葉県南部の代表的な常緑広葉樹であるスダジイ、タブノキ、アカガシ、シロダモ、ヤブニッケイ、クスノキ、カクレミノ、ヤブツバキ、ウラジロガシ、ヒサカキなどが自生している。落葉樹は常緑樹に比較して圧倒的に少ないが亜高木層はコナラ、リュウキュウハゼ、カラスザンショウ、低木層はムラサキシキブ、ツクバネウツギ、コゴメウツギ、カマツカ、ガマズミ、ヤブデマリ、又、他ではあまり見られないウリノキやシラキ、フユザンショウ、イヌザクラなども確認されている。草本ではカントウタンポポ、キンラン、ヤマネコノメソウ、ヨゴレネコノメ、リュウノウギク、アキバギク、シロヨメナ、ヒガンマムシグサ、ウラシマソウ、ヤマホトトギス、ホトトギス、オトギリソウ、アキノキリンソウ、カワラナデシコ、ミヤマハコベ、オオジシバリ、ヤマニガナ、ムラサキニガナ、ツルニンジン、ツリガネニンジン、ヤマルリソウ、キランソウ、タチツボスミレ、タニギキョウ、リンドウ、タムラソウ、ノアザミ、カズサヤマアザミ等数多く観察される。又他地域でもあまり見られないナンバンハコベ、ミヤマタゴボウ、ミツバベンケイソウ、シダ類のナガサキシダなども確認されている。山地性の植物であるモミノキがこの地域にも若干残存している。

ナンバンハコベ

ミツバベンケイソウ

タムラソウ

ウリノキ

ヒガンマムシグサ

ツリガネニンジン

ツルニンジン

ウツギ

ヤマルリソウ

オ）交通

館山駅から日東バス平群線大畑下車、徒歩 2.5 キロ(40 分)で基点の増間ダム下駐車場(トイレ有り)につく。

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

大日山はダムの脇を通っている増間林道と上地区の駐車場から大日山を経由して坊滝へ至る大日山遊歩道があり一周５キロと大日山直下から往復４００ｍ の５．４キロコースと宝篋山・鷹取山を経由して御殿山までの縦走コースがある。一周コースはどちらから行っても好みの問題で大差ない。

大日山遊歩道

◆左周り一周コース

増間ダム下駐車場(トイレ有)出発　5.4ｋｍ　約１時間４５分

行程:ダム下 P→３０分→前蔵引の滝→１５分→坊滝→１５分→頂上下ベンチ→１０分→頂上→５分→頂上下ベンチ→３０分→増間上 P→５分→ダム下 P

◆右周り一周コース

増間ダム下駐車場(トイレ有)出発　5.4ｋｍ　約１時間５０分

行程:ダム下 P→７分→増間上 P→３３分→頂上下ベンチ→１０分→頂上→５分頂上下ベンチ→１０分→坊滝→１５分→前蔵引の滝→３０分→ダム下 P

◆大日山から御殿山縦走コース　１時間２０分

行程：大日山→１０分→宝篋山→４０分→鷹取山→３０分→御殿山

以下御殿山の項参照

③附近の見どころ

ア）自然

◆増間七滝

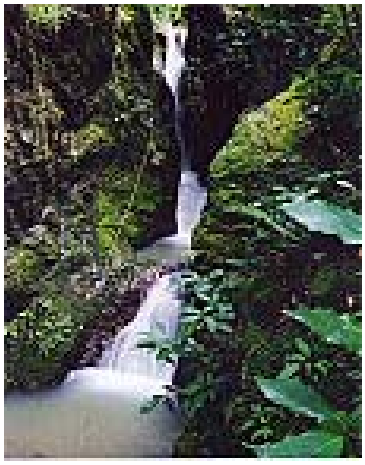
大日山登山コースの途中にあります。そのうち 1 の前蔵引の滝と 7 の坊滝には旧三芳村により大日山の遊歩道と共に擬木の階段が整備してありますのでどなたでも訪れることが出来ます。

・前蔵引の滝　増間ダム上流左俣 F1・村の滝 NO1　落差９．２m
・後蔵引の滝　増間ダム上流左俣 F2・村の滝 NO2　落差７．０m
・薬研の滝　増間ダム上流右俣 F1・村の滝 NO4　落差４．５m
・狩人の滝　増間ダム上流右俣 F2・村の滝 NO5　落差１．５m
・乙女の滝　増間ダム上流右俣 F3・村の滝 NO6　落差６．３m
・乙坊の滝　増間ダム上流右俣 F4・村の滝 NO7　落差８．４m
・坊滝　増間ダム上流右俣 F5・村の滝 NO8　落差２３．０m

後蔵引の滝

薬研の滝

狩人の滝前・後乙女の滝



乙坊の滝

◆前蔵引の滝

増間七滝(前蔵引の滝・後蔵引の滝・薬研の滝・　狩人の滝・乙女の滝・乙坊の滝・坊滝)のうちの一つの滝である。「増間ダム」の入口から増間林道を約２ｋｍほど北進した所の道路右下にある。二段の滝で、落差は 9.2m.ほどあるが普段は水量は少ない。※この滝は現在では増間「日枝神社の御神的神事」の際弓を射る者がここで水浴し、身を清めることから、いつの間にか水垢離の滝よばれるようになった。※従来「日枝神社の御神的神事」は日枝神社の下にあった「垢離の淵」で射手に選ばれた若者が水浴潔斎してから行われていたが、昭和 44 年増間ダム建設により「垢離の淵」が無くなったため、前蔵引の滝で水浴潔斎するようになった。

前蔵引の滝

◆坊滝

旧三芳村増間の増間川上流にあり、増間七滝(前蔵引の滝・後蔵引の滝・薬研の滝・狩人の滝・乙女の滝・乙坊の滝・坊滝)のうちで最大きな滝である。「増間ダム」の入口から増間林道に沿って、北へ約２ｋｍほど進んだところに前蔵引の滝があり、そこからさらに林道を約 1ｋｍ程進んだところに坊滝はある。最奥部にあるため、普段は水量が少ないが雨上がりなどの水量の多い時は、落差が２３ｍ ほどあるので滝の

姿は壮観である。坊滝の名称は、昔「大日山」に建っていた「閻魔寺」(元禄大地震で倒壊焼失)の僧達が修行したことからつけたといわれている。また、この滝は増間「日枝神社の御神的神事」とともに房総の魅力５百選の１つにあげられている。

滝の上部には橋がかけられていて、そこから「大日山遊歩道」が整備されている。

坊滝

◆日枝神社の大杉群　五樹　（市指定天然記念物）

御神的神事(県指定無形文化財)の行われる日枝神社はスダジイ林に囲まれた鎮守の森の中にある。境内にはかなりの杉が植栽されているが、中でも 5 本の大杉は一段と尊厳さを増している。本殿の裏(北側)には 2 本、南側に 3 本の大杉がある。

最も大きい杉①は本殿の裏にあり、樹高３４m、胸高周囲４．５３m. 枝下高１２m、根元周 6m、枝張り東西１０m・南北１０m.で推定樹齢 300 年で、樹姿、樹勢ともに良く守護神的役割を果たしている。①の杉の東側に接する杉②は樹高２３m、胸高周囲２．７３m. 枝下高１５m、根元周３．８４m、枝張り東西１０m・南北１０m.である。

本殿の南側境内には、３本の大杉③④⑤があり南にやや傾き、大枝の一部を切除して、倒木から保護される。③と④の杉は根元が接合しているように見える。

③の杉は樹高２４m、胸高周囲３．０９m. 枝下高１０m、根元周３．６m、枝張り東西１０m・南北１２m.の大樹である。

④の杉は樹高２４m、胸高周囲３．２７m. 枝下高１３m、根元周４．２m、枝張り東西８m・南北１０m.の大樹である。

石段の東側の杉⑤は樹高２４m、胸高周囲３．９２m. 枝下高９m、根元周４．６m、枝張り東西１３m・南北１５m.の大樹である。③④⑤の樹幹の樹皮には全面にコケ類が着生している。社叢のスダジイ林は約１５０種の草木を含み、林床にはホソバカナワラビ・オオアリドオシ目立っている。

イ）歴史

◆増間廃寺趾（市指定文化財）

太平洋戦争末期に食料増産のため大日山の南中腹が開墾された。その時に多量の「布目瓦」(含む土師器片)が出土し、昔からの廃寺趾伝説が確認された。平安初期にあったと思われる寺跡で、大日山蔵福寺(別名閻魔寺)と呼ばれている。

場所は大日山の南中腹である。ここは、外海・内海及び房総の山なみが展望でき、古代三郡(平郡・安房郡・朝夷郡)の各郡に通じる峰越えの要路の地であった。いま、寺としての伽藍はもとより、創建当時のものは皆無で、遺構の推定もできないが、廃寺跡には向背(玄関)の礎石といわれる苔むした石と尼僧に関係のある尼堂、毎朝、懺悔して心身を浄めたといわれる閻魔堂、堂庭、錠前、大花井戸、小花井戸などと呼ばれる由緒ありげな場所がある。

ウ）建造物

◆増間ダム

旧三芳村増間に所在する。館山市、富浦町及び三芳村は昭和 39 年(1964)11 月、一部事務組合(名称、館山市、富浦町及び三芳村上水道組合) を設立、増間地先にダム築造を計画した。　翌年 3 月水道事業経営の認可を得た後、昭和 41 年 6 月工事に着手し、三ヵ年の歳月を費やし、昭和 44 年(1969)6 月竣工した。同年 8 月 1 日から給水開始。このダムは直線中央越流型重力式コンクリートダムで有効貯水量は 50 万トン、貯水面積は５４,０００㎡、堰堤は長さ 145m.幅 3m.高さ 34m.である。

現在一部事務組合の名称は三芳水道企業団と改称している。

増間ダム

## ３）増間鹿島山（ますまかしまやま）

増間鹿島山

①概要

ア）所在　　旧三芳村増間にあり。増間ダムの西方。

イ）標高　　２７０．８ｍ

増間鹿島山山頂からの眺め館山湾が見える。

ウ）歴史

人皇第４４代元正天皇の御代に大飢饉があり、人々は飢えに喘いでいた。この飢饉に際して常陸の国、鹿島大明神の神勅を承けた別当平田権之頭が氏子の川津三郎に重藤の弓を授け「増間に往きこの弓をもって鳥獣を射って食料とし郷民を救え」との神勅を伝達して増間に差遣わせられた由である。増間は古くは独立した増間村であり房州の真中に位し、山間僻地で明治の初年頃までは鹿猪等が棲息し狐、狢等は、大正時代まで時々見受けられたことより推察すると当時は信仰上四足

は捕獲しなかったと思われる。とにかく鳥獣は相当多く棲息して山間に点在する田畑を荒らし廻り農民を苦しめたことは記録によるも想像以上深刻なものであったと思われる。純情、朴訥な増間の人々が鹿島大明神と重藤の弓に救命の恩義を感じて増間の中心に位して聳える日枝神社の背山を鹿島山と名付けてこの頂上に鹿島明神を祭るとともに毎年新暦の３月１日(昔は旧暦の２月１日)を例祭日と定めて郷民の崇敬の的である日枝神社において重藤の弓を用いて農作物の豊凶と気候の順不順を占って飢饉を回避するための行事として、子々、孫々に伝えることとしたものであると伝承されている。　鹿島明神は昭和 32 年(1957)7 月に地区内の 15 社を合祀した際に、本殿裏の左奥に移設した。　(増間御神的由来記)

日枝神社本殿裏 15 社合祀碑

エ）自然

◆鹿島山の植物

日枝神社の裏山で頂上はマテバシイ、スダジイなどの樹木に覆われ眺望はきかないが直下のソテツ畑からの眺めは、目の前に海老敷金比羅山が望め、遠く館山湾など南方の眺めは素晴らしい。植物相は大日山と変わりはないが、調査の時、ソテツ畑脇の山道にはヒガンマムシグサが列をなして咲いていた。

ソテツ畑からの眺め

オ）交通

館山駅から日東バス平群線大畑下車、徒歩２．５㎞(40 分)で基点の増間ダム下駐車場(トイレ有り)につく

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

大畑バス停→４０分→増間ダム下 P→５分→日枝神社→５分→善通寺→５分→登山口→２０分→頂上下展望良好地点→５分→頂上(三角点)ダム下駐車場から頂上までほぼ４０分、帰りはほぼ２５分。

帰りは来た道を引き返すか大峯集落を経て大畑バス停へ。バスの本数が少ないので帰りの時間の確認をした方がよい。

館山日東バス　電話

③付近の見どころ

ア）歴史

◆日枝神社（ひえじんじゃ）

増間ダム西方の山腹にあり、増間地区の鎮守として住民の信仰を集めている。

毎年 3 月 1 日に境内で行われる県指定の無形文化財の「御神的神事（おまとしんじ）」で有名な神社でもある。祭神は大山昨命（おおやまぐいのみこと）で農耕の神といわれている。

由緒については宝暦 6 年(1756)に創建されたという以外は不詳である。社殿は間口 5.5m、奥行き 3.6m、境内地は 825 ㎡である。村内でも有数の大杉(村指定天然記念物)や慶応 4 年(1868)作の伊勢神宮遷宮式の絵馬がある。昭和 32 年(1957)7 月 15 日、地区内の 15 社が合祀され、大山昨命を主神とし日枝神社を区の中心社とした。本殿裏の左奥にその石宮がある。

日枝神社本殿

イ）文化　　財

◆日枝神社（ひえじんじゃ）の御神的神事（おまとしんじ）

「増間ダム」の西方の山腹にある「日枝神社」で毎年 3 月 1 日、稲作の豊凶などを占う神事である。昭和 38 年(1963)に民族資料として県無形文化財の指定を受け、氏子はもとより地区民がその保存に努めている。「増間御神的由来記」によるとその起源は正元元年(1259)とのことである。毎年、2 月 26 日、古式に従った的まと貼りから始まる。

3 月 1 日の当日、慣例に従って選ばれた２人の射手は朝から、鍵元である氏子総代の家に赴き、新湯を浴び、更に垢離の淵で水浴潔斎して、紋付、羽織、袴を着用、所定の食事をすませ、鍵元に伴われ弓矢を携えて神社にあがる。午後１時頃から神社で儀式を行った後、歩射の用意を整え、午後３時半頃から約１時間にわたって境内で弓を射る神事が行われる。重藤の弓２張りと２つの矢立にそれぞれ１２本の矢が用意され、2 人の射手は的から 23 間 3 尺(約 43m.)離れた定位置に立って、交互に射る。矢は、稲の早生種、中生種、晩生種、を想定して、この順序に分け、毎回 2 本ずつ、交互に 3 回、12 本射るので伸べ 36 本射ることになる。矢の当たり具合をその都度記録し、最後に神前に報告した後、その年の天候、適種及び豊凶などを氏子の代表が占う。結果は印刷して参詣者や希望者に配布している。　（県指無形文化財）

御神的神事のようす

４）滝田城跡

八幡台と八幡小祠

①概要

ア）所在

南房総市上滝田

イ）標高

１５５．５ｍ

ウ）歴史

天文２年(1533)里見義豊が叔父実堯(さねたか)を誅殺したことに端を発した里見一族の内乱が起こった。この時、滝田城には「一色九郎(いっしきくろう)」が城主として居城していた。滝田城は同年９月末、戦いに敗れ、落城した。その後勝者の里見義堯が一時期、在城していたともいわれている。築城は、延徳３年(1491)、里見氏の本城稲村城の完成以後、同城の支城として築城されたと言われるが異説もあり、文書による所見がなく不明である。城跡には造築物は残っていないが「竪堀」・「土塁」・「虎口」・「土橋」・「曲輪」・「馬場」などの遺構は残っている。滝田城の最高地点は「八幡台」

と呼ばれている。現在ここに東京電力の高圧送電線の鉄塔たっている。そのそばに小さな石宮がある。これには「八幡宮」と彫られており、その右側には、願主　名主「勘左衛門」左には、寛政５年３月吉日と刻まれている。

エ）自然

◆滝田城跡の植物

滝田城跡付近の植生の特徴としては安房地域の低山の一般的な植物相となっている。千葉県南部の代表的な常緑広葉樹であるスダジイ、タブノキ、アカガシ、シロダモ、ヤブニッケイ、クスノキ、カクレミノ、ヤブツバキ、ヒサカキなどが自生している。落葉樹は常緑樹に比べて圧倒的に少なく、亜高木層はコナラ、リュウキュウハゼ、カラスザンショウ、低木層はムラサキシキブ、ヤブムラサキ、ツクバネウツギ、コゴメウツギなどである。

高木層ではスダジイ、タブノキ、アカガシが中心でスダジイが優先している。林床はアドオシ、オオアリドオシ、ホソバカナワラビ、ヤブコウジ、ツルコウジ、フユイチゴ、キチジョウソウが多い。低山で起伏が少なく、エリアも小さいので、増間地区の大日山と比べると植物の種類は多くない。北側は植林された杉林がほとんどで、林床はヤブミョウガが多い。シダ類はまとまった群落がなく、種数もすくない。また、この区域は集落に近いため、多くはないが植栽されたマテバシイがあったり、マダケ、メダケが尾根や城跡山頂近くまで侵入してきており、特に南面の一部ではタケ類の進入で植生が単純化されつつある。一方、房総丘陵の清和、清澄などで普通に見られるモミ、ホウノキが残存し、令温帯系・山地性の植物がわずかであるが自生している。これらの自生が見られるのは東西の尾根上とその北側である。

オ）交通

根古屋方面から登る場合は日東交通滝田郵便局前バス停下車。

西の谷方面から登る場合は日東交通小倉商店前バス停下車。

それぞれ約５分で登山口の駐車場へ着く。

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

◆根古屋コース

滝田郵便局前から根古屋駐車場登山口・馬場・虎口を経て山頂の八幡台へ。山頂から遠見山(展望台・伏姫翔天の像)を経て西の谷駐車場へ下山・小倉商店前バス停へ。

◆西の谷コース

小倉商店前から西の谷駐車場登山口・遠見山(展望台・伏姫翔天の像)を経て山頂の八幡台へ。山頂から主郭・虎口・土塁・馬場を経て根古屋駐車場へ下山・滝田郵便局前バス停へ。

◆一周コース　マイカーの場合は一周コース

◆遠見山

「滝田城」の八幡台(櫓台)から南東に尾根が細長く伸びている。その尾根伝い２００m位のところに、少し高台になっているところがある。ここが「遠見山」と呼ばれているところである。ここを削平して、平成６年１月「南総里見八犬伝」翔天の像と展望台が建てられた。その展望台に登ると周囲がぐるりとパノラマが広がる。北の方には「伊予ケ岳」が聳え、山間を北から南に「平久里川」、川沿いに開けた田園地帯、南は遥か国府、館山方面まで見渡せる、素晴らしい眺めである。「滝田城」は、「南総里見八犬伝」発祥の地であり、ここはそれにふさわしい景観の良い場所である。

③付近の見どころ

ア）歴史

◆十三塚（じゅうさんづか）　南房総市上滝田真名板

「十三塚」には、13人の戦死者が葬られているという伝説が多く、非業の死を遂げた人々を祀ることから御霊信仰（ごりょうしんこう）が元となり、その供養のために造られた。上滝田真名板の「十三塚」は、犬掛(滝田)合戦で討ち死にした「義豊」方の戦死者、13人の供養塚といわれ、中央に大日如来らしいものがある。討ち死にしたところは、「押し込め沢」といわれている。「義豊」犬掛で敗戦の時、その臣安西左京、山本清六、詫間藤内、早川権之丞、御子神内蔵介等は、尾崎の窟中に入り自殺したという。(安房誌)　また上滝田の岩坂に古墳があって「十三塚」というが、これは中里源太、三浦半四郎、大野卯右衛門、菅谷弥八、木曽兄弟等、十三人戦死の処と伝えられると「安房誌」は記しているが、その典拠はあきらかでなく、軍記類には「十三塚」の記事は見られない。

塚は「県道88号線」下滝田地先の「滝田の青墓」の前を東に折れ、「平久里川」に架かる真名板橋を渡り、約30m先の丁字路を左折し、約150m北進した右手の小高い丘にある。

◆高月城跡　南房総市上滝田

滝田城の川向に位置し、平久里川と平久里道を見下ろす場所にある。北側には犬掛の古戦場跡、南側には滝田川又の古戦場跡がある。標高１５０m、寺のある台地とその裏山が戦国時代の城跡で、遺構として曲輪・空堀・土橋・虎口が見られるそうである。現在は畑や山林となり、龍喜寺の境内としても使われている。

◆龍喜寺　　南房総市上滝田

高月城内にある曹洞宗の寺で、本尊は観世音菩薩である。萬松山龍喜寺といい、「滝田城」の支城といわれている山上の台地の上に、南西

に面して建っている。伝承によると、「義通」の開基とされ初めは、「義通」の法号から「天笑院」といい、その後「義豊」の法号の「高巌院」となり、現在地に移築した後、「龍喜寺」と名付けられた。開基は永正年間「里見義通」によって建立されたと伝えられ本寺は木更津市馬来田にある「真如寺」である。なお、「龍喜寺」には後世の作であるが、「義通」の位牌があり、また境内には稲荷神社が建っている。

◆海軍特攻機「桜花」下滝田基地跡

房総半島南部の主抵抗拠点として位置づけられていた旧三芳村と旧富山町には、海軍が本土決戦の切り札として全力をあげて開発した特攻機「桜花」43 乙型と、５式噴進射出装置(射出用カタパルト)の基地建設が命令された。この秘密特攻基地は、上滝田・下滝田・吉沢・平群 4 ヶ所に分散した基地形態をとり、12 基のカタパルト式コンクリート滑走路を建設する計画であった。

ロケット特攻機「桜花」は、1945(昭和 20)年 3 月以来、実戦に使用されていた海軍の特攻機である。当初の 11 型や 22 型は、航空機に吊り下げられて敵の艦隊近くまで運ばれ、ロケット噴射により高速で滑空しながら体当たりするタイプの特攻機であった。

本土決戦のために海軍は、沿岸に近づく敵艦船を直接攻撃する陸上用に改良した「桜花」43 乙型を試作した。全金属製機体に 800 kg爆弾を搭載して、推進にはロケット噴射とターボジェットエンジンを使った最新鋭の航空機であった。この特攻機「桜花」を離陸させるために、火薬ロケット噴射による台車が高速レール上を移動することにより、短距離で射出するカタパルトを開発した。１基のカタパルトには 5～10 機の「桜花」を配し、全体で 50～60 機が基地全体に配備される予定であった。基地建設は、貧弱な作業用具しかんかったが突貫工事で進められ、教育部隊の練習生や予科練の少年たち、あるいは地域の民間人か勤労動員されたという。下滝田基地建設では、朝鮮人労働者がいたとの証言もあった。8 月に入って、カタパルト基地は完成間近の状態になったが、「桜花」43 乙型実用機が量産に入る前に敗戦となった。

イ）文化財　　海軍特攻機「桜花」下滝田基地跡

◆滝田の青墓　南房総市下滝田芝台の県道脇山裾にある。

この墓は下滝田芝台県道わきの山裾にあり、ここで切り死にした「岡本頼重」の供養碑である。「安房誌」には、「岡本頼重」墓として掲げられ、犬掛(滝田)合戦の時、里見義豊の勇壮無類の忠臣、岡本四郎頼重が大鎌槍の強敵「正木大膳(まさきだいぜん)」と戦い、ここで壮烈な戦死を遂げた。この時、通り合わせた日蓮宗の僧によりこの墓は出来たと書かれている。しかしこれは時代が80年もずれているので『安房志(あわし)』等の伝承の誤りで、「頼重」は義豊の家臣ではなく十代「忠義」の家臣で，慶長16年6月13日、館山より急用にて、地行所の保田に向かう途中、主君「里見忠義」の手の者たる乱波14人と、不慮の事故を起こし討ち死にしたという。その供養碑が「滝田の青墓」である。

高さ45cm幅38cmの青黒色の峯岡石で出来ている。碑面には右に「岡本四郎兵衛頼重(よりしげ)三十二歳」　中央に「南無妙法蓮華経　蓮乗(れんじょう)」左に「慶長第十六辛亥(かのとい)六月十三日」と刻まれている。（市指定文化財）

◆犬掛古戦場跡と義通・義豊の墓

富山地区参照

## ５）三坂鹿嶋山（みさかかしまやま）

三坂鹿嶋山頂上の全景

①概要

ア）所在

旧三芳村千代と三坂の平野部の北西側（三坂字神出ケ谷）に聳える。

イ）標高

１３７．４ｍ

ウ）歴史

山頂には「鹿嶋神社」が建立されている。以前はこの神社に神輿が納められていて、祭りの時には登山道を担いで登り下りしていた。現在はふもとの「三坂集会所」に置かれている。以前は滝田小学校の児童の遠足が行われていたという。

鹿嶋山頂上の石祠

◆鹿嶋神社

祭神は武の神様である武甕槌命(たけみかづちのみこと)。慶長３年(1598)3 月に社殿を創立し、大正１５年(1926)１０月に改築した。慶長元年(1596)の古文書によると「鎮守鹿嶋大神宮の創立は、白雉元年(650)で、長久元年(1040)に再建し、熊野大神・飯綱大神・神明社の三社を合祀したとある。」

山頂にある鹿島神社

エ）自然

◆鹿島山で見られる主な植物

鹿嶋山の植物の特徴としては安房地域の低山の一般的な物相となっている。千葉県南部の代表的な広葉樹であるスダジイ、タブノキ、アカガシ、シロダモ、ヤブニッケイ、カクレミノ、ヒサカキなどが自生している。落葉樹は常緑樹に比較して圧倒的に少ない。ムクノキ、イヌビワ、クロモジ、コゴメウツギなどである。林床にはアリドオシ、ツルコウジ、ハナミョウガ、ナギラン、キチジョウソウ。ホウチャクソウ、ヘラシダ、フユイチゴ、ヒガンマムシグサなどがある。頂上付近から北側は、植栽されたスギ林がほとんどである。

アリドオシ

ハナミョウガ

ヒガンマムシグサ

ツルコウジ

キチジョウソウ

オ）交通

日東交通バス平群線で館山駅から道の駅「三芳村」鄙の里で下車。所要時間約 20 分。千代原や旧農協滝田支店前でも現地に近いが何かと

道の駅の方がトイレや売店などもあり、便利であろう。道の駅から登山口まで歩いておよそ 15 分から 20 分。

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

鄙の里から周遊 3.8ｋｍのハイキングコース。所要 2 時間 30 分。

１時間もあれば下山できるが、頂上の神社や石祠、行き帰りの周囲の草花なども観察してゆっくりと時間をすごしてみてはどうでしょうか。ちなみに、登山口の三坂青年館前から 30 分で鹿嶋山山頂に達する。

帰りには鄙の里の「足湯」に入ってから帰ろう。

６）金比羅山（こんぴらやま）

海老敷金比羅山

①概要

ア）所在

旧三芳村海老敷字寺山

イ）標高

２０８．５ｍ

ウ）歴史

国土地理院発行の地図にも記名がある。山頂には「琴平神社」があり、金比羅様からきた名称ではないかと推測する人が多い。そこからの周辺は山には珍しく平地となっている。地元の人に聞くと昔、馬場であったともいう。一方、御大典(ごたいてん)(皇位継承があったときに行われる天皇の即位の礼)を記念して、山頂に相当数の大島桜の木が植えられた。

現在、直径３０から４０センチの老木が残っている。

林道大学口上滝田線が近くを通り、そこから村の「防災行政無線」中

継局までの道ができたことで、より身近になった。海老敷地区の人々のボランティア活動で周辺の草刈、桜の植栽なども行われている。神社前からの眺望は素晴らしく、館山湾などが一望でき桜の時期には、花見に訪れる人も多い。

なお、増間と山名の境界付近にも石宮があり、※こんぴら山といわれている所がある。※こちらは「山名金比羅山」という。

金比羅山頂上の琴平神社石祠

金比羅山のやまざくらの古木

エ）交通

館山駅から日東交通バス平群線の道の駅「三芳村」鄙の里下車。徒歩又はマイカーを利用する。

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

日東交通バスで道の駅「三芳村」鄙の里で下車北上して千代原を右折し平久里川を渡り直進し、大学口の夢の花館先から左折し林道上滝田大学口線をとおり途中の分岐点から右に上がり防災無線の管理道を行けば頂上の三角点に達する。脇に防災行政無線のアンテナが建っている。その南に琴平神社の石祠があり、そこからの眺望は素晴らしく、館山湾などが一望できる。春には山桜の花見が満喫できる。4.2 キロおよそ 70 分の行程である。

麓から第二の堰を経由して登る一周約５キロの山道コースもある。

こちらはおよそ１時間４０分で一周できる。

③付近の見どころ

ア）歴史

◆「役の行者の石像」

林道上滝田大学口線途中の、山下大阪山頂上付近の洞窟にある石造は、昔から山下区の人々に「甚平様」として崇められていた。しかしこの石像は何をあらわすものかわからなかった。　昭和５８年６月３日、三芳村史編さん委員の調査の結果、この石像は「役ノ行者」であることがわかった。役ノ行者は役ノ小角といい、奈良時代の呪術者で、第 42 代文武天皇３年(６９９)５月、世を惑わす妖言をなしたかどで、伊豆大島に流されたと伝えられる。後世、いろいろな伝説が作られ、修験道の開祖と仰がれていた。大坂山のこの石像は何時ごろ、誰によって作成されたのか不明であるが、房州産の凝灰岩質砂岩を用い精巧に作られている。現在、行者像は安房地方には次の所に祀られている。大山寺(鴨川市平塚)、滝淵神社(旧富浦町大房)、養老寺(館山市養老寺)、神作家(鋸南町保田)

## ７）二反森（にたんもり）

二反森の全景

①概要

ア）所在

旧三芳村上滝田字二反森

イ）標高

２１７ｍ

ウ）歴史

旧三芳村海老敷金比羅山の峰続きの北方約６００メートルにある山で、山頂北側を林道御門増間線が通っている。林道沿いにある山頂は旧三芳村により公園として整備され、素晴らしい展望地となっており、桜が植栽されて、「さくらおか」と名付けられている。

二反森のヤマザク

ベ ン　　チに腰をおろせば、平久里の彼方に富山が双耳峰を誇示し、正面には大台山(余蔵山)が大きく聳え、眼下には大畑や池田集落の民家が雄大な景色に点景を添える。左手、平久里川の向こうに見える、山の頂上付近に赤い展望台があり、後ろに一段高く送電塔の立つ山が頂上の八幡台であり、寛政五年建立の八幡小祠がたっている。馬琴の『里見八犬伝』発祥の地となった城跡である。

二反森から大台山を望む

二反森から富山を望む

エ）交通

日東バス平群線平山バス停下車徒歩５分

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

◆道の駅「三芳村」鄙の里から金比羅山入口まで３．９㎞、およそ６５分、金比羅山入口から１㎞、およそ２０分の行程である。帰りは下滝田の御門集落を経て下滝田の平山にある特攻基地跡をめぐるコースもとれる。約４㎞およそ７０分のコースである。

◆金比羅山や二反森のコースに含めて鄙の里をスタートして鄙の里ゴールの１１．６㎞実質およそ３時間２０分食事休憩見学時間を

入れて５時間から５時間半

③付近の見どころ

ア）歴史　　◆海軍特攻機「桜花」下滝田基地跡　４）滝田城址参照

## ８）房央三郡山

山名和田宅から見上げた房央三郡山

丸山最奥の家から見た房央三郡山左奥

①概要

ア）所在

旧三芳村（増間・山名）の境界尾根上にある三角点峰

イ）標高

２１６．４m

房央三郡山三角点

ウ）歴史

明治２９年(1896)安房の国が一国一郡となる以前の旧三郡の境にあったことからこの名が起こった。

『房総史料続編』に「増間村より本織村に至る經路有、嶮山を越る也、三郡山と名付と。東は朝夷郡丸の宮下、北は平群郡増間、南は安房郡山名村なり」とある。『三芳村史』「概説」では、「三郡山（山名の金比羅の東峰）」と記している。

房央三郡山頂上から南方を望む

エ）自然

山名金比羅山の参道の尾根上にある山である。

◆房央三郡山で見られる主な植物　07.03.10 調査

スダジイ、カクレミノ、アオキ、シロダモ、クロガネモチ、メダケ、モミジイチゴ、ナツトウダイ、ホソバシュロソウ、キチジョウソウ、コクラン、ヤブコウジ、ツルコウジ、ジャノヒゲ、ノイバラ、シュンラン、ヒガンマムシグサ、ノ　　ダケなど

ホソバシュロソウ
アオキ

オ）交通

館山駅から日東バス丸線川谷下車、徒歩２．８キロ(５０分)で最奥の家。又はマイカー利用で林道山名線登山口へ。ちなみに最奥の家まで車は入る。

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

◆宮下コース

「山名の金比羅山」の登山コース中の尾根鞍部にある最奥の一軒家」から尾根を左に入り、尾根道を２分も登った右手の高みが山頂で、竹やぶの中に四等三角点標石がある。道路わきのテープを巻いた木の所から数メートルの所に確認できる。参考文献では竹やぶで展望はないがと書かれていたが、竹やぶが枯れたおかげで眼前の樹木の上から遠く館山湾が望まれる。鞍部の畑地からは西が開けて「旧三芳村の田園風景が眼下に広がる。尾根道を先に５分も行って左に入る道をおりれば才開川に出て、川沿いにくだれば川谷バス停に出る。又、左に入らず尾根道を伝って直進すれば林道山名線三叉路付近に出る。

川谷バス停→2.8㎞(50分)→宮下最奥の家→200m(２分)→山頂→2.8㎞(30分)→川谷バス停　約６㎞ほぼ１時間半

◆増間コース

林道山名線を増間側から入り桜公園手前の別荘(東京電力電柱石堂３８４から入り、５０m程行くと峠状の所に千葉県設置の鳥獣保護区の看板があるので、そこを右折れして尾根通しに進み５分もすると左から東西に延びた尾根に到達するので左に行ってすぐ右に下ると丸山側最奥の家から来る山道に突き当たるのでそこを左に下りる。(右に進むと金比羅神社)５分足らずで丸山側最奥の家に達するのでそこを南に尾根を直進する。後は前記のコースによる。

登山口から１０分から分で頂上に達する。

◆山名コース

林道山名線を山名側の飯出からくる三叉路手前の畑地へ登る道へ入り突き当たると昔、金比羅山へ参詣していた山道に出るので左折する。しばらく行くと地蔵があり、更に直進すると、房央三郡山に到達する。登山口から約８００m２０分、ここを北に直進すると２分で丸山側最奥の家に到着する。最奥の家後ろの道を右に登り分岐点から左折し山を回りながら直進すれば７分ほどで山名金比羅神社に到着する。帰りは引き返すか又は一及び二の逆コースをとる。

登山口からほぼ２０分で頂上に達する。

## ９）山名金比羅山（やまなこんぴらやま）

山名金比羅山の全景

①概要

ア）所在

旧三芳村山名)飯出地区の北約１㎞にある。

イ）標高

約２６０ｍ

ウ）歴史

山頂に金比羅神社があるところからこの名が付いたが『三芳村史』には、「琴平宮・山名と増間の境界線上の、こんぴら山に建っている神社で、樹木が繁茂し遠くから目印として望むことができる。亀ノ子石、手水鉢などが今でも現存している」とあり、また「金比羅さま」は山名村の鎮守熊野神社の境外末社であり、さらに『山名村明細書上帳』には「神職コレ無ク、当村智光寺奉幣致シキタリ候」としている。狛

犬、天狗のお面なども残っている。当初は瓦葺きであった模様だが現在は傾いているものの、波トタンで修復してある。又地元の人の話によると山頂付には昔馬場(現在は杉林)があったと伝えられている。石造の鳥居は昭和２５年に讃岐の金比羅宮を参拝した記念に溝口孝氏(故人)が奉納したものである。

狛犬

山名金比羅神社

山名金比羅神社の石祠

天狗の面２つ

エ）自然

東西に長い山で、東端は旧丸山町との境界尾根に接し、その峰続きに三郡山に連接している。

◆山名金比羅山の主な植物　（０７’３．１０調査）

アオキ、イヌガヤ、イヌマキ、イボタノキ、オオアリドオシ、オオ

バグミ、オオバジャノヒゲ、オオバノイノモトソウ、オモト、カクレミノ、キジョラン、キチジョウソウ、キヅタ、クマワラビ、サネカズラ、ジャノヒゲ、シュロ、シラカシ、シロダモ、スイカズラ、タブノキ、テイカカズラ、ナガバヤブソテツ、ナキリスゲ、ノイバラ、ノビル、ヒイラギ、ヒサカキ、ヒメウズ、フウトウカズラ、フモトシダ、フユイチゴ、マサキ、マツザカシダ、マンリョウ、ミヤマシキミ、ヤツデ、ヤブコウジ、ヤブニッケイ、ヤブラン、ヤマツツジ、リョウメンシダ

アオキ

オオアリドオシ

オオバジャノヒゲ

スイカズラ

フウトウカズラ

オ）　キチジョウソウ　交通

館山駅から日東バス丸線川谷下車、徒歩２．８㎞(５０分)で最奥の家。又はマイカー利用で林道山名線登山口へ。ちなみに最奥の家まで車は入る。

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間等

◆宮下コース

旧丸山町宮下の最奥の一軒家」から尾根を左に入り、尾根道を２分も登った右手の高みが山頂で、竹やぶの中に四等三角点標石がある。道路わきのテープを巻いた木の所から数mの所に確認できる。参考文献では竹やぶで展望はないがと書かれていたが、竹やぶが枯れたおかげで眼前の樹木の上から遠く館山湾が望まれる。鞍部の畑地からは西が開けて「旧三芳村の田園風景が眼下に広がる。尾根道を先に５分も行って左に入る道をおりれば才開川に出て、川沿いにくだれば川谷バス停に出る。又、左に入らず尾根道を伝って直進すれば林道山名線三叉路付近に出る。

川谷バス停→2.8 ㎞(５０分)→宮下最奥の家→200m(２分)→山頂→2.8㎞(30 分)→川谷バス停　約６㎞ほぼ１時間半

◆増間コース

林道山名線を増間側から入り桜公園手前の別荘(東京電力電柱石堂384 から入り、50m 程行くと峠状の所に千葉県設置の鳥獣保護区の看板があるので、そこを右折れして尾根通しに進み５分もすると左から東西に延びた尾根に到達するので左に行ってすぐ右に下ると丸山側最奥の家から来る山道に突き当たるのでそこを右に進むと５分ほどで金比羅神社に達する。左に下りると宮下側最奥の家に達し更に進むと房央三郡山に達する。後は前記のコースによる。

登山口から 10 分から 15 分で頂上に達する。

◆山名コース

林道山名線を山名側の飯出からくる三叉路手前の畑地へ登る道へ入り突き当たると昔、金比羅山へ参詣していた山道に出るので左折する。しばらく行くと地蔵があり、更に直進すると、房央三郡山に到達する。登山口から約８００m ２０分、ここを北に直進すると２分で丸山側最奥の家に到着する。最奥の家後ろの　道を右に登り分岐点から左折し山を回りながら直進すれば７分ほどで山名金比羅神社に到着する。帰りは引き返すか又は一及び二の逆コースをとる。

登山口からほぼ３０分で頂上に達する。

## １０）十三塚（じゅうさんづか）

平沢トンネル手前の堰と十三塚

十三塚

①概要

ア）所在

旧三芳村山名と旧丸山町沓見の境界にある。

イ）標高　１１３ｍ

ウ）歴史

昔は両地区を結ぶ峠道がこの山を越えていたが、現在は山の下を平沢トンネルが貫通している。『豊田村史』に、「西部山脈中沓見ト稲都村山名の界ニアリ、其高一百二米」とある。山頂に十三塚と呼ばれる周囲より少し盛り上がった(説明がなければ見逃してしまう)塚がある。古老によると、昔この山にいた山賊を退治して埋めた墓で、家に病人が出た時などこの塚に祈願すると病が治ると伝えられている。地主の人に聞くと数年前まで近くの人が参拝していたという。十三塚について柳田国男は『石神問答』その他で全国各地にあり、普通村界の古い道沿いなどに塚が十三基並立するのもので、いろいろな伝説を伴うが、合戦で討ち死にした武士の墓とするものが多いと述べている。なお、安房では他に、犬掛合戦がらみのものが旧三芳村上滝田に、里見家廃絶にかかわるものが館山市出野尾にある。

エ）交通

館山駅から日東バス丸線沓見下車、徒歩１㎞(１０分)で登山口。

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

日東交通沓見バス停で下車、１００ｍほどバックしてすぐ右折し、直進、右に堰を見て直進すると平沢トンネルがある。十三塚にはトンネル入口右の旧階段を登ってもよいが、杉林の中の直登はきついので、トンネルを抜けて右側の農家の庭先から旧峠道があるので、この峠道の途中、畑の脇から右に２００ｍ ほどでトンネルの上に出るので左折する。少し小高いところが十三塚である。以前は自然林の中にあったらしいが現在は地主の方が切り払って明るくなっているが、案内がないと見過ごしてしまいそう。地主にことわって案内板を立てておいた。

沓見バス停→1.0ｋｍ(10 分)平沢トンネルトンネル先右農家→200m(8 分)→十三塚頂上(ほぼ 20 分で頂上)

## １１）三峯山（みつみねさん）

三峯山の全景（山名天皇前の神社裏から）

三峯山三角点

①概要

ア）所在

旧三芳村山名及び御庄と旧丸山町沓見の三大字の境界にある。

イ）標高

１２３．１ｍ

ウ）歴史

『豊田村史』に、「西部山脈中最高峰ニシテ高さ一百二十四米アリ、

沓見・山名・御庄ノ三大字ニ跨ル、山上ニ陸地測量部三等三角点アリ」とある。

エ）交通

館山駅から日東バス丸線沓見下車、徒歩１キロ(10 分)で登山口。

②ハイキングコース

ア）距離及び標準時間

十三塚から尾根続き 500m ほどのところにある山である。十三塚までは十三塚の項参照。十三塚から南西尾根を 500m ほどの所に三等三角点のある山があるがこれが三峯山である。十三塚から１５分もすれば到着する。付近は戦時中軍隊が掘ったと思われる穴が数箇所認められる。三角点のピークは、現在南東方面は樹の間越しに丸山方面が垣間見れる。北西方面は山名の田園風景が見られる。又北方の山名金比羅山の特徴ある姿を望見できる。

歩行も案外楽で森林浴と展望を兼ねたハイキング向きのコースに好適におもわれるが、眺望の確保と尾根筋への確かな出入り口の確保が必要である。

十三塚の項にも書いたが個人の山であるので注意したい。帰りは来た道を引き返す。　沓見バス停から 1.7ｋｍ(35 分)で頂上に達する。

③付近の見どころ

ア）自然

◆山名熊野神社（くまのじんじゃ）の樹木と石橋

山名の熊野神社は嵯峨志台地にあり、「お熊んさま」と呼ばれ親しまれている。祭神は伊弉諾命で、境内は樹林が繁茂し、神社の杜として荘厳である。

本殿裏には大きな杉の巨木があり、境内にはホルトノキの巨木やスダジイの巨木など直径５０㎝ 以上の巨木は１８本を数える。林床にはこれらを含め１４８種の草木が見られる。又、日清・日露戦没者碑や出羽三山講碑・出雲大社碑などが建立されている。この神社の参道を登り詰めたところに下の農道と交差する石橋があります。明治期の作と思われますが、切り出した石材を巧みに組み合わせ、お互いに支えあって出来ている一眼の眼がね橋である。当時の石屋さんの巧みな技

術が偲ばれる。

平沢トンネルから直進９００mで市道谷向山名線と交差する十字路に出るがその先トンネルの手前約１００mを左折すると熊野神社である。

イ）歴史

◆智蔵寺（ちぞうじ）

曹洞宗富士山智蔵寺は、文亀三年(1503)前の甲信太守「武田次郎三郎源信勝」の開基、開山を大巌存高大和尚といい、その

後中興の開基を「印東采女」としている。俗に山名の大寺と呼び、曹洞宗で福井県の永平寺を大本山として、安房における曹洞宗の名刹として重要な役目を果たしている。寛永１５年(1638)より安房国中部で１万石を領した三枝勘解由守昌以来、幕末近くまで三枝家代々の菩提所であった。

次のような有名な寺宝がある。

・長狭の彫刻家初代武志伊八郎伸由の応竜の彫刻が本堂の欄間にある。

・開基、武田信勝、中興の祖である印東采女夫妻、近世大名三枝守昌の位牌が安置されている。

・「貝多羅葉経」がある。バイタラ葉には鉄の如き堅いペンのようなもので経文がパーリー語(現、カンボジア語)で記されている貴重な経文の綴りである。

・寺域内の墓地には、三枝守昌と次子「諏訪頼益の墓」や「武田石翁」の手によって彫られた「溝口八郎右衛門」の行者姿の石像がある。

その他智蔵寺筆記二十世「真翁大純老師記」や「三枝氏御先祖書之写」(寛政２年記)などがある。

前述の熊野神社手前の交差点から南 300m右山腹にある。

智蔵寺から天皇前と呼ばれる「山名八雲神社」まで５００m、更に日東バス御庄バス停まで１，４００m。所要２５分。

智蔵寺

## ４．見どころ

### １）その他

①鄙の里

農産物直売所「物産センター」と特産品販売所「交流センター」がある。

物産センターにはとれたての新鮮野菜や果物がズラリとならび、まひろばの里の恵みを味わえる。

交流センターは、レストランがあり、大きなオープンキッチンが印象的で郷土料理づくりなどが体験できる。

地域の農業体験などの情報発信なども行っている。

鄙の里の全景